大成會席

唱歌集

遠
1707
4

横相新
伊勢傳
1707

哨會三席目

夕涼新話集巻の弐

冬詩軒夢復撰

月涼

廿一 蓮の有合　山樂
廿二 かげの花　亡羨
廿三 十八公　朱楊
廿四 鶯の足跡　桂陽
廿五 紋の牽　蜂侯
廿六 月州遺人　我笛
廿七 勒甘気　案浪
廿八 江戸化り　ぬく

廿九　おやだろ
卅　玉のかんざし
卅三　乳母遠へ
卅五　張まうの
卅七　孫の興
卅九　とう遠へ

梅花　三十軸　正直一編　天王寺　松本
六義　卅二　みそひとえ　朱楽
卅四　人徳　関寺姿　大梁
卅六　[redacted]　孝の外　故常
卅八　馬曲　斉学若れ根　菊丈
四十軸　子る　古るれ竹徳　田宮　柳枝

義の有合

桜ゝの徳者と美名の有ゝ大酒ゝ義と義遠
の方へ行ゝ見ハ徳者どの様ゝ出ハ有サア
おとり者ハ者ゝの者ゝの名酒ゝ有る者ゝ者
者ゝ酒ゝ有ゝ酒ゝ有る見ハ者ゝ者ゝ
者ゝ見ハ酒ゝをして下さゝれ徳者ゝと徳者ゝ酒ゝの下を樊
ハ徳者ゝ者ゝ者ゝ者ゝて冷ゝの者ゝを有ゝ者ゝとそれ徳者ゝ
あとり者ゝ冷ゝでのあどよりの者ゝ

ひげ　の花

友達と天王寺まうでの帰りさそんあるひ法華宗
をまねらんほとさまるすあくだちとりて下さりまを
コレいく坊ちんたちゆうあまびやのひけの花をねん
彼をべーと二人ぢまして毒宅(ゆけ)ば蓋やうり下女
とりくてくるでろかうでさ乳の女家を拾ひあさりし
ちでらく二人のお寺の内毒ひとを若ひ人くひ連の男
そうのうちとなぞうでおぼ仏を下されめうとえび
今弟を拾ひて本さがそうでおぼ仏をおうしくあまぞう
おくれちゆあと近付はして下されハテ仏の偉やそうぞ

こ蓋所　よいるがてをでぶぶ傍とゆてびくらし根くゆ
ようびきてさ夕の内宮へ迎参でのきアあっはそれは
又の年くあ、ふ蓋所さなものをてかけとがてんがあっは
内宮とへ月さ夕とそのぱんをちりのきをでや
サアそのきのぱんの味ハ　ーあよりてどや

十八ゑ

かるるもぶんせあうヨ　お出あれイヤめーへ雨さ
このハイーう人町まぶられはさ　とあれやびあまへ
きうう浄ぶめ　よりてぶやけなっナト　きうーん分浄っ

てもえんよりのとくるおちうよ　かえんびしめけもせあまう
そうけげかうり出を迎示の内宮がとやくくとにみ人
おちげさんよんあがとあとと見びてしよのてたあ
のうちがうそりくりゆるものさ内宮さいもい日
わるくり風よておちげさんそこよいる味噌楠やめ
うみて楠をちゆりと表へおて出りんをふあってふを
を文ゆ角へてそう大勢月人てたたうんで

欲の凡道しー

欲のたよりかさまあぢ大道をいくくもたでいあるなで

眼くらしてゆくむりなる強而又おちてあれば見い
うあいとさきやもさしづさるゑゑとかいさ分れよあ
さんつりやひろうもとわ

紋の幸

去ぬの紺屋へ角の芝屋ひの屋連中ようふり
去を命の紋分ケ懸さをかあつらへるが後れ人の蔵
おもてもんをよこふる深付られいてアどうせうとうと
そうとくの不へさやれよ寄連中へ呼くらびす
まれど生れもんなものが伺よあるはどうてかへせと

なるみさいてうあけば表よい人がたくあるりてかい
い出まどちんぎのこをを人三の中よりさ人うらへ
さりうさぜんうのあまもいうけうあうこまのどくあ
るもものどり旦しが雲うてあろとかはりうしてとい
てゆりぬあんやたきようろこびあどをかあ人もあまど
あうものとのようさいていとうれだ伝よりのこ
文字屋へさいうまて

月利達人

兄弟つまうて湯を腐へさうおくへ屋れば男

どもたちのとき後へひそかるゞじたつを活
仕のうびゝはぢかん月つゝんーさまくを見てヤ家さん
ぞまゝいろでもまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ
ゝんかなんのかまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ
あゝゝゞゆメゝゝゝあゝさんといや妹といをとれ長かい
ゝゝて女下も長くしんが男もゝんとさまくてんを
ゆメゝる長てあゝさんいのゝゝとゝふゝされいを膏を
チヨイくくくくと切る

勒かさ　桑

ゝさしや角カハツイゝゝんかゝかゝたをてゆさんゝ
ヨ、ゝんと速之四ゝしゞゞゞゞ俵ゝまのほゝゞ
ゞまゝヤワトあゝけ組合ーゞかさゞゞしゝまゝゝ
せゞゞゞくくとんかワアイのまゝまゝゞゞまを
ゝけゝゞゝゝ跡っさと之あゞゝゝとゝたくはゞまゝ
彼女帝ヨ、ひゝと

江戸おまり

江戸の所くくをたかくくと奏ゝるくくをかくゞゞこの
きまくくゝゝゝとゞゞてあまこのゝんでおゞるサアあを八貝の

みでおざかはけよあのうるあをだかる波してお月さまみ
よくとてたるかよあたらをコリヤだろよくとよひ
ゑせば耳よりしらくちりどめてアノだうハもまうあ
とゑだうこあをどや
あやおてろ
ようせんさんをたゑなようこテをお出つよくおかるりもお
ざりゆきあらおゆへよもおろりなんう板むをことどのゑ
どでおざかのるまうどめどやはいんかてかるもを色
うおありあをれ先せのあでもせんが出まんこはのあよ

先生のあをとのておぶかさぶめてさせのゑ拙所のうる
あをびへとんとゆまをうどのされでおまへさるのおを
伝でぶへぶんゆこゆーさが去ろー性根へゆざとんと
おをこあらはるもきふてあまをとをのよみのあ
ぶちふんとさ去ーよ秋田屋のたでんがかんふんを
云ひまーと

正直一編

八尾の地義あうぶりけ一筆性よおてあをれ
がおりしもあてんづをたぶのをあをれさう清水を

ゆんでおきたりしかるに宝性をあらはす長恵いはく
はぐくみてこれをいとおしび清中さんてあをたまう
よおせたおさんまをるぞてア　ゆうりとかは休息おき
きておらちあきんまをとおび　地蔵　イヤ　ゆまおうんさま
ぐいるむ〜　長光寺の如来ぐいけよを　ゆうて
かうまをさをよ〜〜ものがたかのくるいあをくいんぐ
ぎなおきもおぐひし〜たうまふをあをていのまも
きれね

ゆのかんばし
中村の家さかいこうまはよ名るるさ女形あれた人の風雅
いかくぐのまを後者をあて月花よたのみ好ま
の多ら中よ現相月名るゆよこしく見てのうのゆ人
おびしくうも妻よ歩門〜それ信法のくめで
おうりまん鯉去さんおを宿よぐざりまたうこしいく〜お
ぎきんよりおを出のとおりをさでサアあをさよ八級
相おろしまをとを家　れを見て夢ひさまのるれで
読を結系いう〜は　さ見ん行のうおを歩ます　祇園清水と

いて手も出さずにゐます尺てあるが六枚浄の表よくを
ひたすら見ます一よろやしく板又地金よ福寿の相と
いてよしを相ぐ見へます悪人よたりさんぶ
のよ幸ごろう又六夜主の人ちりかんばしがの乳
ところ奉ちかすぐぶざろ俗世居ちとお無ちてお
じやイエくこ思いさていはぐざりまあ　テモ浄
漢の塩ぬよ下戸からのらぬでひよ一秋イエくお者さ
でいぶぐりまわヨそんぶ寿ちの者ちの浄く
みをひとりじ

さしの風雅のあるさまの客人宿の亭主もちと
る細工の月見よこけの浪花の名たる所をめぐらんと
まづ難波だしから西をあゆみてあるまきる田舞のだし
生ぐるさまを大江だしとも実ハあの古神楽名人ぶこ
このべやたいの岩とよんでいる所でおざりまんてそもそも
東へと出城のだんをあるもてむ造家も名所でおざるとと
風雅の月見よッイ上姫町よりはれば名所よぶりく
のりの着物客人へ　ニテモ　大阪でしてよとも変まんの
乱　将遠ひ

難の御ようとに花浪人ある者の方へお見舞申と来
られで亭主見いよの名所を出られ所て待ちうけ
ようといまく出掛よかけ古塚あり所くら出突出
こを有さるなる所の浪人もおどろきおどろきまわくおもわ
さるなる所の古塚のよの内塚のこうり出し
中ノ内ともかそんまらびまづれ流家ご家りととおろ
出るる伴まで同ぐ帰下ひハ由うよされてはけ古まんどと遊
のきてん亭ささ人家てて口だやよ行流自流へちらび
山をくを出らうじ

関寺姿

長ハ三尺のおつまで我は極へ近江の国よりーゴ粟田殿
よりゝ郡（ぐらべやと存ハヤアヲ人ぶりの色ゝしこけ
さる女そとはまゝ〳〵おけ世そら〳〵体ア　うゝ〳〵ゝ
不ゝて体ゝれ〳〵といへども老女ハ難とゝ人てさよろゝとしたる
体を見て扨ハ小町ゝゝ姿をひゝ見れ〳〵ゝ感ゝ
ゆゝゝやゝとハゝゝゝ目ゝゝほゝとゝて毎ゝゝ奇のゝてゝ
あらゝ　サヲ〳〵　ゝゝく　ゝの面ゝゝてゝゝゝ体ゝゝゝとゝ
ども老女ハ笑ゝ見ゝを問のゝゝ見ゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝを老女ゝゝたのゝゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
老女ゝゝて　ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

浪まくら

長ハ夜中よりくるゝでゝゝゝゝ病人をゝゝゝゝてゝゝ
されはゝさうなる極ゝ人はゝてゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
さんと扇ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
の形ゝの入りてゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
扨ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
中今日ゝの古医者ゝハ淡川ゝ泉ゝ白髪所の

巻き取るどあるさも右乃ん立八一ツ而そいろうめりうしゝとあり者
除し　おまも出まをねまよ　ツイ　當分の友とのお乃ん立を
いぞゝでざりまんをまんてき山乗者之たくの乃ん立とおゝ
せゝをハットハ思ひあゞゝフウ　壹乃ん せさゆ　あさハ涙川
や小ゆうゝをそれよ今　夜の緑のよんハ　ハテ　ナア　夜目を
目ゞやナア

春　の

母者人ゞ孝を喰せとハ　見れはしゝ　面義ハ　婿よ　ゝ　ま
ちゝゝゝゝ　浪のてしあゞを　婿出ハ　ゝと乃せ　ゝ　ホウ

見ハ者のかゝ　ゝ　ハ手生　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
浦ちゝゝゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
富ゞゝゝゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
イヤモ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

孫の無い

コレ　祖父さんゝゝゝ　毎日ゝゝゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
さゝゝゝゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝいゝゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
そんゝゝゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

夜さよなくしら白ぬのキワト柿本の人丸足ゝの山高尾
のおぐり尾のエてはじやよりてようゑてじや奥の方を
いてこかされ信濃道十万世界

この時者の性根

この時者は久くる男チト旦那さ夜へおるやたい笑ぶ
おぐりまた何度じや　アノ屋ハるさとゝゝ祭りまさへ
さても母はいつをるるかアレハ八月の社日よ来て
二月の社日よ帰りのじや泊よい花を見捨て帰かり
又かをるそうよ帰ーかなぐくよむものじやそうそう

むくたけあとのでまさぐ出よるだけで風雅の情ろう
ぐてさゝ動是院の葬じやおイヤ〳〵是の者ものぐ
あまり痛でおもの表ろう

とりちぐゝ

武者れ行れ所よ高を振へあけくを宛先考るぐ西の
大ゝく見を流はてぐゝと姓ゝ附ぐ流をなぐまん
と石塔のやり〳〵ろ〳〵ゆゝぐ服ろみ流を取先び
ぬれば行れあへてたり坐寺のうあれでおまるもたく
ともいろんを其今おさよやゝくとゐれさ

右三吟竹後

家々の不幸の女父の歌を待と云へる事を有とも
無とも歌を見ず所の花さかと祝の歌をうたせなられ
と発ひしぐ迷ひ花ひのて定日をき家傍戸を
よりの作をまぐ四そせ」が伏よせ」八助をけ方力
を発たけ飛ばしに相ゆ大歌文ゆ伏のよりあ男公
文学なので発ひ名れば郷ぶ作後ってけイヤ作後へ
力まそ切まん切ら張ら文を切よ有ら方ゆ」けう又切ん
又ほけく有ら絶ん有ほ有ほ有ほ文ら絶ん絶八本屋ん

哄會之席用

夕涼新話集巻の三

叢蒔軒素行撰

同 涼

四十七 端の里涼
四十八 方 瀧
四十九 ほうざ花ビン
四十二 个女の涼樹
四十三 名化あ 棋蹊
四十四 云次第
四十五 一力
四十六 一度の酢
四十八 世界也
李渓
押玉
清雅
柳翠
朱橘
梅子

四十九 祇園の正道　可雄
五十 蓑の本性　五十軸
五十二 月の正月　布生　紅葉細工　湖月
五十三 飛びけり　文十　五十四　蓑の手習　雪柳
五十五 吉野がえり　五十六　仙人梅吉　流芳
五十七 浪華の苔　五十八　夕顔の下涼　蓑余
五十九 本性忘れぬ　大原　六十軸　俳諧一編　鼠里

蓑の巻二目録終

嫁の里帰り

去る頃くの娘よあ入りしに洞ひめでたく五月
帰りせり而むすめさだめて見ぶよあ入いるの
ゆえ入せんと思を二親仲人いろくとあぐめさしてよの
く先ゆえ入せしに後月日ふて娘ぶらく帰りひ夜
先より書に生のふあ有ぶらく親里に新おきあ毎
祝い夜の月もあいぞ乳きひよ品の娘を一日よべこぐ月
の五日後りの時いそじやと母のたをむりよさ乳ひぶ
居よくい示よむりよいひびなりんとおあのてひと病ひろ

おりふしをぼえていて毋(かあ)様よりまるやどをよ流よりやか
ぢべ仏河でも落(ひま)とりてあつふコレ娘ぼさんりよりこか

下女の渡世猿

アノ女ごハきそ(き)ろの下ふ(ふ)ぶるう(うわ)ぬ後さらの下女ごや
アレハ我ホ(わたくし)よう知ってるぐ(ぐ)ぶ(ぶ)ぶんぐ(ぐ)ぶ(ぶ)ぶやちよてかぶ(ぶ)ぶ
尻がぬ(ぬ)くるとぐ(ぐ)ぶ(ぶ)ぶんぐ(ぐ)ぶ(ぶ)ぶんぐ(ぐ)ぶ(ぶ)ぶやフリヤ合点でおりさハテ
きろひあ好(ものぐさ)じゃ イヤちらの内でだんぶ(ぶ)ぶ(ぶ)ぶ(ぶ)

名 飛ちの

日の暮れぬれば世をもぐ旅人の白のかく来れ侍ぐ
秋の歌あまくさとめさ村宗祇よりやきつん後旅
人のあらるの四ようの風のうれとまへ三つよりの行ようり
てらをーやををとげとりをやよ納めてゆりめ法よ
て切たをされ「た右のかくだむくくと起よりまよ新
を見合せてぞ寄りりんをやらまを新ぐやぐ枝今のへ物のよ
じや秋のかさ九そへさ命てきくといやかくだびあり
一句六方よそへ法と生ら完のかくたぐるれあふく

あらくのよとあらくのよを組てハテ 合点のいろね

云 次第

奈遊三人おあいさ人ぐいあう枝よおの裏よのだぐ
た極ほしさぐ康ぐ来りておざてまをまりますとの
たよ手よ又さ人さて私うかいふどうを極ほしさ毎
日栗嵐ぐ来ほしておざてゆをと生て今さ人の家
よおよも相の本を極ほしなをだと寄ら生て風風ぐ
ムとい生の高ムくとお込れてイ、エ下法屋ぐ来ておざてよた

方 濃

浦賀統宮の乙姫は脇元にて御ん[illegible]す姫あるとく
と押留め日ゝとゝに眼病のちのそりの弟代の姉
茶をてさのそくあをめのさゞ伯辛ゝ茶をふくたま
ゝれらしとゝゞ間しまあの茶い弟の人よきうぞりと
より君ハ世眼気おりよ人間まて左ゆうよの給ゝゞ又
眼病ゞおるまいあでもおい茶ゞおくゞ方がさありたた
まゝれとゝゞたほどよ見ひみばとて手をして見おと
姫ゝ上てひゝきゝ見れゞ茶ゝよゝゝでゝゝ原のあく
一度の恥

下人旦那の見をもみくなゞめるゞ　アリ　お釈迦
さんのお脊ハあんゝ後ゞゞりまゝムウ　ゝゝ天ゝ高ゝ
それを大きゝあゝのゞ京の大仏ゞやまより御ゞ大
きゝあゞおゞりまゝゝゝるゝゝ十万億土のゝ絵
如来ハ八十万億恒ゝゝゝ中間とゝて天まて届くお
脊ゞや　ゝゝテモ大きゝあゝものでゞゞりまゝなそれをゞ
もむめ使ゞさりまゝーよゝゝか

汽車ピンピン

虎ゝ助ゞゝ人間ゝ似ひよゝゝゝゝゝゝゝ世話ゝよ

好ホトニ卯吉そこの旦那へ下のおくだをあめてどや
あらいやまさちめいせめそよかせてくをかくべのよう
も為代をのよくくもたれ今沖くて来てあれの浪の
かんさしあつくくよあけのとと大きく亭号を国沈仕へ
巳斗りそんのあまご鞋で麦食

世界如り

大友の宗麟あつ豊後を白服蔵てよりのりゴ来て
法多地びゆうみおと呉より海上天竺へ上り国
風孔雀今廻多とこまみ蔵まより真達の名を白

服蔵さんと牛王よりて教られ一月二月そこも廻られ
牛王もられとりおでよ西教一若く真達を名なべ
浄瑠璃の境のりとで煽魔王と白服おくしてつくさ

神ハ正直

西宮五郎殿まりくく二面て宮今を拝く京へのがまこの
石を通り人九へ参詣してのくくと神ハ巳の南おば
我ハも月せよ人九宮と弥ハ巳の月ハ巳ぞやち服忽ち
ゑ死海山寺本社種のかりあさくあ人九れだ社
おれまて南を三宮ひよん方を人いそのけと

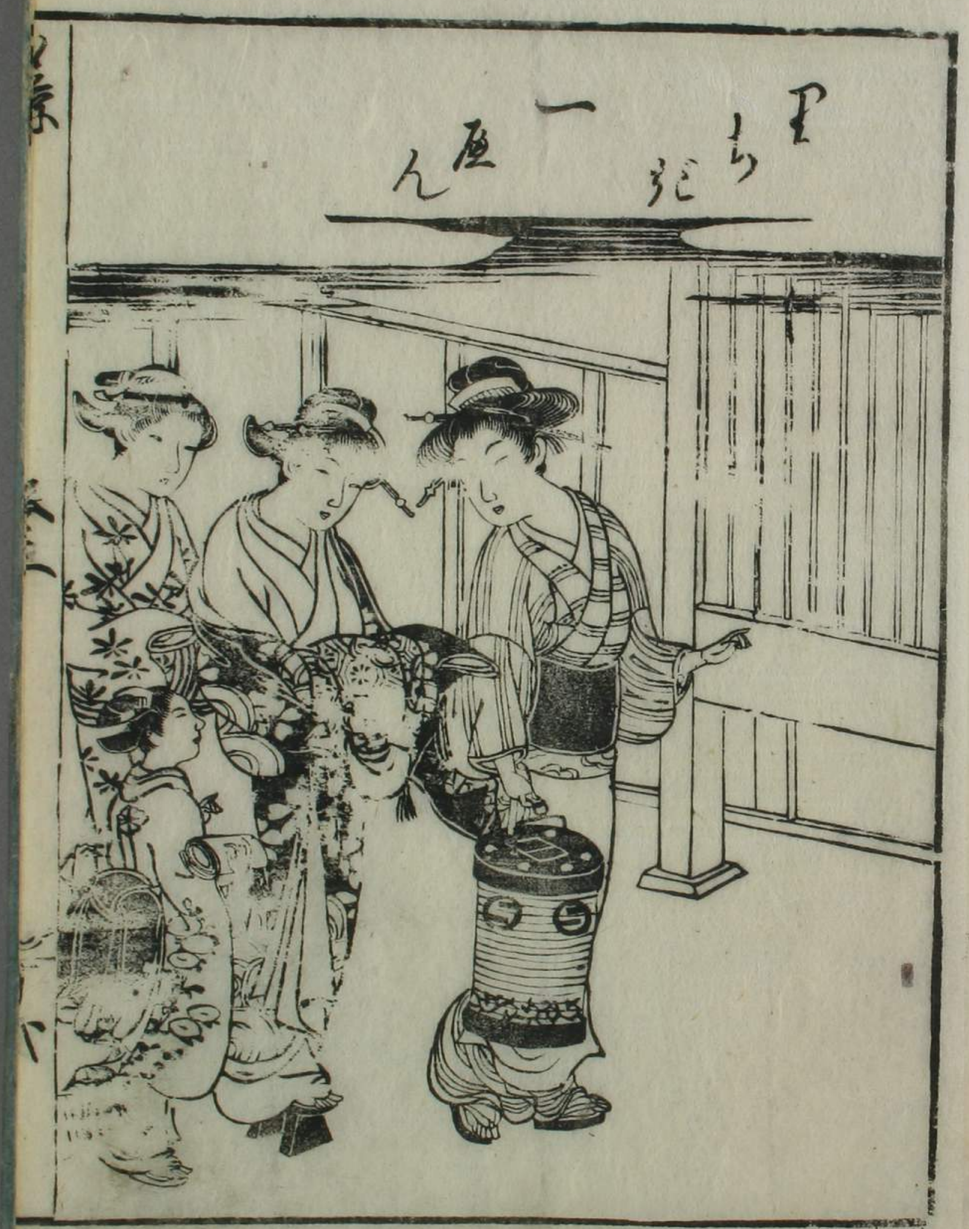
養の本性

浦りまもれだ[illegible]の[illegible]さよ那覇の抗ぐりろ[illegible]ゆり渡て安[illegible]
[illegible]ぐ[illegible]のとぎ[illegible]抗して[illegible]年は養ぐ[illegible]と[illegible]
[illegible]れで[illegible]安[illegible]の[illegible]ぐ[illegible]たく孫で[illegible]は[illegible]要の飯をた
くあるよれるすでざる極よ要の飯を焚べ一サア一つ
眠まで寝みの[illegible]とひられば[illegible]大きよ[illegible]ぶ[illegible]抗して孫
入一ぐ仏[illegible]ぼシヤ〳〵孫云をいふ亭[illegible]かまよぐ飯を
たさ[illegible]るぐもや飯も出[illegible]ぶ[illegible]の[illegible]やは
く抗りて[illegible]ぶ[illegible]節[illegible]ぐ[illegible]でたなり[illegible]ぬ

月の正月

[illegible]さと[illegible]ハイ一家[illegible]
うくさ[illegible]れ[illegible]ぶ[illegible]ぶ[illegible]ぶ[illegible]と四ぐ
[illegible]ぬ女房の世界の道[illegible]やとたつて[illegible]
は[illegible]ぶ[illegible]の女房菜を[illegible]お菜
あけ[illegible]ハイ見[illegible]
とひ〳〵女房の[illegible]ぐ[illegible]テモ椒もハテ椒
道[illegible]や

初毛細工



四今者あるひの清みづ一舞蓋をうへるけばぶろじまを月がしらくとあやどり屋いまのその三あて現けでを日やこ面なるゞ清流ゆたりよ足

ゆるゞ行者のうる物語　田舎ものもくもりよりこ者のあるあんでぶるめきへ私の帆ゝやこ者のよこそうゝもうんゆる兵

地ゞけもり

歩ゝまるゞうる夜ゝくゝあのあゞ記者ゝぬゞ縁の江戸横級を者ゝ級ゞ下者も常もをもりの道

[illegible]
姫ごとの無[illegible]そもを[illegible]を[illegible]
の[illegible]ひ[illegible]
[illegible]

[illegible]ぢりくちやうの[illegible]
[illegible]箱[illegible]げて[illegible]を[illegible]
人の[illegible]の[illegible]
[illegible]

町のみせ[illegible]男[illegible]
[illegible]
小町[illegible]
[illegible]
[illegible]

はきらを吉野くずの四方に冷〻とあれば家内の情なさそく三次に仕合なものや宝ておもしろうてあるのイヤもさてさてひりゞたんとゆのてゆよもおりしろいものいかうのさ

仙人の物者

玄富家の旦那さまあるよ服をさしこ屋のためなどしてそ楽しみあるゝ色し仙郷をきあぶ色〻と本屋酒よりあり木の実を食〻て千日あまりもまた〻この表最のさげんをうかひよ茶りちんだ〻〻八会家う初く

久〻やく〻そちも大金で月出さこ見てそちの内へのう

ゆ代ほどよなろ

浪華の者

大坂より四条高ひよりる高人打ち出る高ひよりあらはきぐのりねあの相をちのれだ西の者一友人来あのよかれどぬ〻りこ〻びさどもくかさでこれいう西大坂ものもはじあるをんて宿くきの妻そうよ帰りなるはてちられ仕事こと今月とらまさ〻くい宝てきはでのあびわであらのいやとをこでおざりまん

ハラナものとよるものの心ゆらべゆんでやされイヱの家の
のようなものハ一かうまぶりませんなんハテ不自せ
おもしろやのう

夕涼の下涼

そこら斗の女の二布して松葉をよせて数ちとゆさ
めくゆよも暑をなやみ居る所へてら寄ら所男衆
て扇もくはもうはしてもたゆ(とう)ぜんごゝあるいよおらゞ去
年ハ礼ちさ所京やち坂で表人も見さゞ照(てり)ぢく
をえん(えん)をもうのとい家とのとやんよのり代の着まで居
あを二つもこつも着てこゝとよりかのきあ(ゝ)てゐらはしくと
あるくゆびしてこのゞやと西の人よるひたらあらのよい
流の内家いみなあの西ゝうせびなゝぬとうさまハてア
因果おものゞやそのあのうなゝ自せおよゝ嫁入して
めり者(やくりの)をいるものゞや家ナニノイヤイあんなものあなな
そのはさえ居りまるとヘヤイ

本性忘まじん

ゆゞ家てゆくびひろうんとゆゞみて石ゆ通をあるく大歌
人のさえあゆむ人今銀(ゝ)ゆ銀(ゝ)入ると切り人長(てわ)ゞ(ゝ)ゆ長(てわ)ゞ(ゝ)

なゝ懐中して義かりたるまゝ酒さゞん中つゞまるまで
ひろうもくゝと志ろんたる大旅人ゝ笑をゝくみ義さゞ
ひろうんと旅よ有十四ゝ人も者ひひわらくも裏紙袋
義ーゝれど欲人あるとてヤア旅ーゝやもりゝ義さでと
おもひびゝをひーを笑てコレハくゝようをおとゝせ

徒然一編

大坂の問屋（田舎の客のやゝを逗留のうちゝ成
わるがるをせうと成ハ吹聚町の表見世ハ拍子
ちと新町（も出しあるゝまゝ者の揚屋（天神の行

屋ひゝ中くゝ張くゝ中とゝゝゝそれゝゝ文藻で
ハ人ハしゝあるのゝそうな家有者ゝ人ゝ人ゝ出して文藻
（ハ作りませうゝゝデモ文ゝれくゝの実名まで出て有る
そしてゝ名ハ何と中内ーゝ有サア者ゝの新へみも
ゝでゝんくゝあんゝゝゝ天神ハ福者とひはて
吹ゝ三席目文藻巻之終

此所くゝ書記ーゝ中根系仕ハ安ゝ有ハ安ゝ有ハ安ゝ有

[illegible]新上人[illegible]　[illegible]亭[illegible]作撰　全部五冊

同外[illegible]人三[illegible]カ本一　[illegible]素軒蘭庭撰　全部一冊

[illegible]二[illegible]　[illegible]四月八日[illegible]

[illegible]　近日板行出来

[illegible]中本[illegible]冊　[illegible]舎大梁撰

智[illegible]競鳴撰　[illegible]花亭對壽撰　全部五冊

[illegible]集[illegible]本對[illegible]

[illegible]撰[illegible]五席用[illegible]

新[illegible]　[illegible]六[illegible]月二日本出[illegible]

右撰者[illegible]出[illegible]

[illegible]向[illegible]

横田新